

靈龜元年、歲次乙卯の秋九月、志貴親王の薨
ずる時に作る歌一首 并せて短歌

二三〇番

梓弓あづさゆみ 手てに取り持もちて ますらをの さつ矢手やた
挟ばさみ 立ち向むかふ 高たか円山まに 春野はるの焼やく 野火のと
見るみまで 燃もゆる火ひを 何なにかと問とへば 玉梓たまほこの
道みち来る人ひとの 泣なく涙なみだ こさめに降ふれば 白しろたへ
の 衣ころもひづちて 立たち留とまり 我われに語かたらく な
にしかも もとなとぶらふ 聞きけば 音ねのみし泣な
かゆ 語かたれば 心こころそ痛いたき 天皇すめろぎの 神かみの皇子みこの
出いでましの手火たひの光ひかりそ ここだ照てりたる